

はじめに

本稿に係る分類群を構成する両生類と爬虫類は、まったく異質の動物群である。両生類は繁殖を水環境に頼り、水と切り離せない動物であるのに対し、爬虫類は胚の発生に必要な水環境を卵の中に保持する羊膜を獲得し、繁殖も含め、乾燥した環境での生活にほぼ完全に適応している。こうした顕著な違いがあるにもかかわらず、両生類と爬虫類が一緒に扱われる大きな理由は、分類学の創始者リンネ (von Linné, C.) が両生類と爬虫類を、ともに下等脊椎動物ないし外温性の四足動物ということを一括して扱った伝統が未だに続いていることにある。

両生類・爬虫類とは何か

両生類はデボン紀の終わりに、硬骨魚類中の肉鰭類から派生し、初めて陸に上がった動物群である。現生かつ国内産の両生類は、尾と四肢を留めた有尾 (サンショウウオ) 目と尾のない無尾 (カエル) 目との2群から成る。これらの2群は体表に鱗がなくて皮膚はつねに裸出し、その代わりに皮膚を湿らせておくための腺が多数ある。卵生で、卵は通常水中に生みつけられるが、地上に産むものでも卵に石灰質の殻がない。胚には羊膜がなく、尿膜もそなえていない。幼生 (オタマジャクシ) は一般に水中で生活し、鰓で呼吸するが、成長する途中で変態して鰓を失い、肺と皮膚とで呼吸するようになるのを原則とする。しかし、ハコネサンショウウオ属は変態後、皮膚呼吸だけを行う。

爬虫類は石炭紀後期の間に初めて現れた。羊膜は、爬虫類から進化した鳥類にも哺乳類にも共通してみられる。そもそも爬虫類とは、均質な群ではないため、一律に定義し難いが、羊膜をもつ脊椎動物から、鳥類と哺乳類を除いた群集といえる。現生かつ国内産の爬虫類は、カメ目と有鱗目の2群に大別されるが、有鱗目はトカゲ亜目とヘビ亜目を含む。体の表面は鱗となった角質層に覆われるのがふつうで、羽毛や体毛をもたない。肺呼吸のみを行うのがふつうである。ただし、越冬中の淡水生カメ類などでは皮膚呼吸の割合は比較的高く、喉や総排出腔内の粘膜を通じた特殊な呼吸も行う。繁殖様式は卵生、胎生のいずれかで、卵は卵殻をもつのがふつうである。

島根県の両生類相および爬虫類相ならびに絶滅のおそれがある種のリスト

まず、この間における文献・標本・現地調査の結果から、島根県内に生息する両生類は、8科29種が確認された (表1「島根県両生類目録」参照)。内訳は、有尾目3科15種、無尾目5科14種である。在来種に限ってみると、前者は3科15種 (外来種なし)、後者は5科13種 (外来種はウシガエルのみ) の、合わせて8科28種となる。一方、島根県に生息する爬虫類は、10科16種が確認された (表2「島根県爬虫類目録」参照)。内訳は、カメ目4科5種、有鱗目6科11種である。こちらも在来種に限ってみると、前者は3科3種 (外来種はクサガメおよびミシシippアカミミガメ)、後者は6科11種 (外来種なし) の、合わせて9科14種になるとみられる (狭義の日本列島におけるクサガメ集団の外来種説を支持した場合)。なお、目録に収録した種の分類学的配

列、和名および学名は、日本爬虫両棲類学会 (2025)、および Sugawara et al (2023) を参考にした。

ここで注目すべきは有尾目の種数 (15種) である。うち13種がサンショウウオ科で、ともに全都道府県で最多を誇ることは特筆に値する。

そして、本分類群における選定対象範囲の検討を行い、海生ではあるものの生活史の一部を海岸 (砂浜) に依存し、かつ県内に上陸して産卵する種 (該当種はアカウミガメのみ) を対象要件に加えた。

さらに、今度の改訂に係る本分類群の掲載種について検討した結果、両生類から20種、爬虫類から6種が選定および評価された (別頁「両生類・爬虫類掲載種一覧」参照)。

掲載種に係る選定および評価の理由は種ごとの解説に記載の通りだが、準絶滅危惧 (NT) から情報不足 (DD) に変更となった2種 (タカチホヘビ・シロマダラ) については、あくまでも絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性を有していることに留意されたい。また、今回の改訂により選定対象外となった3種 (カスミサンショウウオ・タゴガエル・ジムグリ) について、その理由を記すと次のとおりである。

- ・カスミサンショウウオは、この間における分類学的再編により、基準標本産地を有する九州地方に固有の種となったことから除外した。
- ・タゴガエルおよびジムグリは、どのカテゴリー要件にも該当しない、との判断に至って除外した。この2種は、その生態上、ともに人目につきにくく、それゆえ珍しいと思われる側面があるかもしれない。しかしながら、タゴガエルは県内の奥山および里地里山の、谷筋という谷筋にふつうにみられる (鳴き声が聞かれる) し、ジムグリも県内の奥山および里地里山でしばしば目撃されている。ジムグリがもっぱら好んで食べる地中性小型哺乳類 (モグラ類やネズミ類) の、全体数の減少を示唆する客観的資料が見当たらないことも、根拠となった。

これを前回改訂時の掲載種数と比較すると、絶滅危惧 I 類 (CR+EN) は1種、絶滅危惧 II 類 (VU) は3種、準絶滅危惧 (NT) は3種、情報不足 (DD) は4種、それぞれ増えている。

おわりに

以上、本稿では両生類と爬虫類の全体にわたって、そのあらましを説明した。以後につづく選定種ごとの解説では、生態や存続を脅かす原因についてなるべく具体的な説明に努めた。ぜひとも読んでいただき、両生類と爬虫類が人間の暮らしに身近な存在であることを再認識していただければと思う。

そして、ともに生きる幸せを未来へつなげるべく、行動を起こされるきっかけにいただければ幸いです。

(岩田 貴之)

【参考文献】

疋田努 (2012) 爬虫類の進化. 248pp. 東京大学出版会, 東京.
松井正文 (2005) これからの両棲類学. 316pp. 裳華房, 東京.
松井正文 (2017) これからの爬虫類学. 288pp. 裳華房, 東京.
日本爬虫両棲類学会 (2025) 日本産爬虫両生類標準和名リス

ト (2025年11月29日版) . <https://herpetology.jp/wamei/>
(2026年1月25日アクセス).
Sugawara, H., Iwata, T., Naito, J., Yamada, M., Onomura
K., & Nagano, M. (2023). Taxonomic validity of *Hynobius*

hidamontanus (Caudata: Hynobiidae): descriptions
of four new species from western Honshu, Japan.
American Journal of Zoological Research, 8(1): 6-26.

表1 島根県両生類目録

| 目名 | 科名 | 種名 | |
|------|----------|---|---|
| 有尾目 | サンショウウオ科 | アキサンショウウオ | <i>Hynobius akiensis</i> Matsui, Okawa et Nishikawa, 2019 |
| | | アブサンショウウオ | <i>Hynobius abuenis</i> Matsui, Okawa, Nishikawa et Tominaga, 2019 |
| | | イズモサンショウウオ | <i>Hynobius kunibiki</i> Sugawara, Iwata, Yamashita et Nagano, 2021 |
| | | イワミサンショウウオ | <i>Hynobius iwami</i> Matsui, Okawa, Nishikawa et Tominaga, 2019 |
| | | オキサンショウウオ | <i>Hynobius okiensis</i> Sato, 1940 |
| | | サンインサンショウウオ | <i>Hynobius setoi</i> Matsui, Tanabe et Misawa, 2019 |
| | | チュウゴクブチサンショウウオ | <i>Hynobius sematonotos</i> Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019 |
| | | ニセヒバサンショウウオ | <i>Hynobius pseudoutsunomiyaorum</i> Sugawara, Iwata, Naito, Yamada, Onomura et Nagano, 2023 |
| | | ヒダサンショウウオ | <i>Hynobius kimurae</i> Dunn, 1923 |
| | | ヒバサンショウウオ | <i>Hynobius utsunomiyaorum</i> Matsui et Okawa, 2019 |
| | | メガメサンショウウオ | <i>Hynobius mengamemontanus</i> Sugawara, Iwata, Naito, Yamada, Onomura et Nagano, 2023 |
| | | シコクハコネサンショウウオ | <i>Onychodactylus kinneburu</i> Yoshikawa, Matsui, Tanabe et Okayama, 2013 |
| | | ハコネサンショウウオ | <i>Onychodactylus japonicus</i> (Houttuyn, 1782) |
| | | オオサンショウウオ科 | オオサンショウウオ |
| イモリ科 | アカハライモリ | <i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie, 1826) | |
| 無尾目 | ヒキガエル科 | ニホンヒキガエル | <i>Bufo japonicus</i> Temminck et Schlegel, 1838 |
| | アマガエル科 | ニホンアマガエル | <i>Dryophytes japonicus</i> (Günther, 1859) |
| | アカガエル科 | オキタゴガエル | <i>Rana okiensis</i> Daito, 1969 |
| | | タゴガエル | <i>Rana tagoi</i> Okada, 1928 |
| | | ナガラタゴガエル | <i>Rana sakuraii</i> Matsui et Matsui, 1990 |
| | | ニホンアカガエル | <i>Rana japonica</i> Boulenger, 1879 |
| | | ヤマアカガエル | <i>Rana ornativentris</i> Werner, 1903 |
| | | ウシガエル | <i>Lithobates catesbeianus</i> (Shaw, 1802) |
| | | ツチガエル | <i>Glandirana rugosa</i> (Temminck et Schlegel, 1838) |
| | | トノサマガエル | <i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell, 1861) |
| | ヌマガエル科 | ヌマガエル | <i>Fejervarya kawamurai</i> Djong, Matsui, Kuramoto, Nishioka et Sumida, 2011 |
| | アオガエル科 | シュレーゲルアオガエル | <i>Zhangixalus schlegelii</i> (Günther, 1858) |
| | | モリアオガエル | <i>Zhangixalus arboreus</i> (Okada et Kawano, 1924) |
| | | カジカガエル | <i>Buergeria buergeri</i> (Temminck et Schlegel, 1838) |

表2 島根県爬虫類目録

| 目名 | 科名 | 種名 | |
|--------|---------|--|--|
| カメ目 | ウミガメ科 | アカウミガメ | <i>Caretta caretta</i> (Linnaeus, 1758) |
| | イシガメ科 | クサガメ | <i>Mauremys reevesii</i> (Gray, 1831) |
| | | ニホンイシガメ | <i>Mauremys japonica</i> (Temminck et Schlegel, 1838) |
| | ヌマガメ科 | ミシシッピアカミミガメ | <i>Trachemys scripta elegans</i> (Wied, 1839) |
| | スッポン科 | ニホンスッポン | <i>Pelodiscus japonicus</i> (Temminck et Schlegel, 1838) |
| 有隣目 | ヤモリ科 | ニホンヤモリ | <i>Gekko japonicus</i> (Schlegel in Duméril et Bibron, 1836) |
| | トカゲ科 | ニホントカゲ | <i>Plestiodon japonicus</i> (Peters, 1864) |
| | カナヘビ科 | ニホンカナヘビ | <i>Takydromus tachydromoides</i> (Schlegel, 1838) |
| | タカチホヘビ科 | タカチホヘビ | <i>Achalinus spinalis</i> Peters, 1869 |
| | ナミヘビ科 | シロマダラ | <i>Lycodon orientalis</i> (Hilgendorf, 1880) |
| | | ジムグリ | <i>Euprepiophis conspicillatus</i> (Boie, 1826) |
| | | アオダイショウ | <i>Elaphe climacophora</i> (Boie, 1826) |
| | | シマヘビ | <i>Elaphe quadrivirgata</i> (Boie, 1826) |
| | | ヒバカリ | <i>Hebius vibakari vibakari</i> (Boie, 1826) |
| | | ヤマカガシ | <i>Rhabdophis tigrinus</i> (Boie, 1826) |
| クサリヘビ科 | ニホンマムシ | <i>Gloydus blomhoffii</i> (Boie, 1826) | |

両生類・爬虫類掲載種一覧

計26種

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

○メガメサンショウウオ^(注1)

計1種

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

○アキサンショウウオ^(注1)

○アブサンショウウオ^(注1)

・オキサンショウウオ

・オオサンショウウオ

○アカウミガメ

計5種

準絶滅危惧 (NT)

○イズモサンショウウオ^(注1)

○イワミサンショウウオ^(注1)

○サンインサンショウウオ^(注1)

・チュウゴクブチサンショウウオ^(注2)

○ニセヒバサンショウウオ^(注1)

・ヒダサンショウウオ

○ヒバサンショウウオ^(注1)

・ハコネサンショウウオ

○ニホンヒキガエル

○トノサマガエル

・オキタゴガエル

・モリアオガエル

・カジカガエル

○ニホンイシガメ

・ヒバカリ

計15種

情報不足 (DD)

○シコクハコネサンショウウオ

・ナガレタゴガエル

○ニホンスッポン

◆タカチホヘビ

◆シロマダラ

計5種

(注1) カスミサンショウウオの分類学的再編により、カスミサンショウウオから分割(新種記載)された。島根県に分布するものが8種、かつ、カテゴリー3区にわたることも考慮し、すべてを新規掲載種とした上で、カスミサンショウウオ(九州地方の固有種とされた。)は掲載対象外とした。

(注2) ブチサンショウウオの分類学的再編により、中国地方の個体群はブチサンショウウオから分割(新種記載)された。このため、ブチサンショウウオから種名を変更した。

【記号説明】

- ・：カテゴリー区分変更なしの種(10種)
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種(0種)
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種(0種)
- ：新規掲載種(14種)
- ◇：情報不足からの変更種(0種)
- ◆：情報不足への変更種(2種)

【掲載順の準拠文献等】

日本産爬虫両生類標準和名リスト

絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

有尾目サンショウウオ科

メガメサンショウウオ

Hynobius mengamemontanus Sugawara,Iwata,Naito,Yamada,Onomura et Nagano,2023

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|----------------|
| - | - | 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種・分布限界種(北限)

環境省カテゴリー

-



■ 選定理由

既知のすべての生息地で、生息条件が悪化しているため。

概要

本種は2023年に、それまで混同されてきたヒバサンショウウオ(2019年に記載された種で、それまではカスミサンショウウオと混同された。)の分類学的再検討を経て新種として記載された。和名は島根・広島両県の境をなす、女亀山の島根県側における呼称「めがめ」に由来する。成体の全長は10cmほど。そして、体色や形態に関しては、①背側部の基色が茶褐色ないし黒褐色、②尾の上縁にもつ黄茶色の条が不明瞭、③尾の下縁には黄茶色の条をもたない、④背中線をもたない、⑤前・後肢を体側に沿って後方・前方に折り返すと、両指趾が重ならない、⑥後肢長の頭胴長に対する比率が31%より小さい、といった傾向にある。後肢は4趾性。産卵期は3月ごろ。卵嚢は外被が脆弱で螺旋状に巻く。幼生期間は水中の小型甲殻類などを食べて成長する。変態後は林床の倒木や転石の下などに隠遁し、ミミズ類などを食べる。日本固有種で中国地方のごく一部(島根県および広島県)に分布する。

県内での生息地域・生息環境

飯南町のごく一部に限られる(ただし、美郷町にも分布している可能性が)

●参考文献

Sugawara, H., Iwata, T., Naito, J., Yamada, M., Onomura, K., & Nagano, M. (2023). Taxonomic validity of *Hynobius hidamontanus* (Caudata: Hynobiidae): descriptions of four new species from western Honshu, Japan. *American Journal of Zoological Research*, 8(1): 6-26.

る)。奥山の谷筋で、湧水からなる湿地が本種の繁殖地となっている。谷筋を覆う森林は、おもにスギやヒノキの人工林である。

存続を脅かす原因

生息地域では近年、かつて植栽されたスギやヒノキを伐採するための林内路網(林業専用道や森林作業道)が作設され、谷筋が分断されたり湿地が消失したりした。さらに今後は、谷筋が皆伐されると、残された湿地においても水質が悪化してしまうおそれがある。

特記事項

日本産の小型サンショウウオ類は分化が著しく、各地域に固有の種が分布するが、本種ほど限られた分布域をもつものは他にない、といっても過言ではない。

本種の保護上、谷筋における人工林の皆伐計画は保護樹帯の設定に改め、植栽木の抜き伐りを通じて広葉樹を育成し、将来的には針広混交林や広葉樹林へと誘導することが望ましい。

本種は再記載前のヒバサンショウウオとして、販売・頒布を目的とした捕獲や譲渡し等が規制される、種の保存法の特定第二種国内希少野生動物種に指定されている。

(執筆: 岩田 貴之)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

有尾目サンショウウオ科

アキサンショウウオ

Hynobius akiensis Matsui,Okawa et Nishikawa,2019

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|-------------|
| - | - | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種・分布限界種(北限)

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



■ 選定理由

大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあるため。

概要

本種は2019年に、それまで混同されてきたカスミサンショウウオの分類学的再検討を経て新種として記載され、2022年には再記載された。全長70-100mm。成体の体色は背面が黒褐色ないし黄褐色で、尾の上縁にもつ黄茶色の条は不明瞭な傾向にあり、尾の下縁には黄茶色の条をもたない。そして、背中線をもたない傾向にある。後肢は基本5趾性だが、集団によっては4趾のこともある。繁殖期は3月ごろ。卵嚢は外被が脆弱で螺旋状に巻く。幼生期間は水中の小型甲殻類などを食べて成長する。変態後は林床の倒木や転石の下などに隠遁し、ミミズ類などを捕食する。日本固有種で中国地方の一部(島根県および広島県)に分布する。

県内での生息地域・生息環境

邑南町に限られる。里地里山にあって、地下水が滲み出ている止水域

●参考文献

Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., & Tominaga, A. (2019). Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current herpetology*, 38(1), 32-90.
Sugawara, H., Naito, J., Iwata, T., & Nagano, M. (2022). Molecular phylogenetic and morphological problems of the Aki Salamander *Hynobius akiensis*: Description of two new species from Chugoku, Japan. *Bull. Kanagawa Pref. Mus. (Nat. Sci.)*, (51): 35-46.

および静水域(池や側溝の場合もある。)が本種の繁殖地となっている。これらの湿地を有する森林および林縁は、スギやヒノキの人工林をはじめ、クヌギなどからなる雑木林である。

存続を脅かす原因

生息地域の一部では過去にゴルフ場や公園が整備され、進入路の建設も相まって、貴重な湿地が消失したとみられる。追い打ちをかけるように棚田における耕作が放棄され、本種の繁殖適地である水辺が減少しつつある。また、治山施設(山腹基礎工)による環境改変で消滅したとおぼしき場所もある。今後、湿地の水源に必要な森林が人工林の場合において、林内路網(森林作業道や集材路)が谷筋に作設されたり伐採後の再造林がなされなかったりすることで水質が悪化したり水源が枯渇したりするおそれがある。

特記事項

本種は再記載前のアキサンショウウオとして、販売・頒布を目的とした捕獲や譲渡し等が規制される、種の保存法の特定第二種国内希少野生動物種に指定されている。

(執筆: 岩田 貴之)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

有尾目サンショウウオ科

アブサンショウウオ

Hynobius abuensis Matsui, Okawa, Nishikawa et Tominaga, 2019

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|-------------|
| - | - | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



両生類・爬虫類

選定理由

大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあるため。

概要

本種は2019年に、それまで混同されてきたカスミサンショウウオの分類学的再検討を経て新種として記載された。全長78-134mm。成体の体色は背面が黄褐色で、尾の下縁には黄色の条をもたない。後肢は5趾性。尾は長く、基部は円筒形であまり側扁しない。

繁殖期は3月ごろ。卵嚢は外被に条線を有し、やや脆弱で螺旋状に巻く。幼生期間は水中の小型甲殻類などを食べて成長する。一部は幼生のまま越冬するが、変態後は林床の倒木や転石の下、棚田の石積みなどに隠遁し、ミミズ類などを捕食する。日本固有種で中国地方の一部(島根県および山口県)に分布する。

県内での生息地域・生息環境

津和野町に限られる。奥山および里地里山にあって、地下水が滲み出ている止水域(池や側溝の場合もある。)および静水域が本種の繁殖地となっている。

参考文献

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編)(2018) 環境省レッドリスト2018補遺資料, 20pp.環境省, 東京.
松井正文(2025) 日本産サンショウウオ図譜, 312pp. 技術評論社, 東京.
Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., & Tominaga, A. (2019). Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current herpetology*, 38(1), 32-90.
日本爬虫両棲類学会(編)(2021) 新 日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.
吉川夏彦・富永篤(2019) 2013年以降の日本産有尾両生類の分類について. 爬虫両棲類学会報, 2019 (2) : 177-194.

これらの湿地を有する森林および林縁は、スギやヒノキの人工林をはじめ、クヌギなどから成る雑木林である。

存続を脅かす原因

生息地域の各地では過去に圃場が整備され、林縁におけるコンクリート三面張り用排水路の敷設も相まって、多くの生息地が消失したとみられる。追い打ちをかけるように棚田における耕作が放棄され、本種の繁殖適地である水辺が減少しつつある。また、治山施設(山腹基礎工)による環境改変で危機的な場所もある。今後、湿地の水源に必要な森林が人工林の場合において、林内路網(森林作業道や集材路)が谷筋に作設されたり伐採後の再造林がなされなかったりすることで水質が悪化したり水源が枯渇したりするおそれがある。

特記事項

本種は、販売・頒布を目的とした捕獲や譲渡し等が規制される、種の保存法の特定第二種国内希少野生動物植物種に指定されている。

(執筆: 岩田 貴之)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

有尾目サンショウウオ科

オキサンショウウオ

Hynobius okiensis Sato, 1940

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|-------------|-------------|-------------|
| 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種, 基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあるため。

概要

全長は幼生期で最大6cm、変態後は最大13cmに達する。成体期における体背の基色は濃い鉛色で、これに鮮やかな黄斑がある。ただし、黄斑がない個体もいる。尾は基部から後方1/3までは円筒形だが、それより後方でかなり側扁し、尾端ではキール状に近い。後肢は5趾性。幼生期は黄褐色を呈し、胸部および尾部には大きな黒斑がある。

繁殖期は3月ごろ。転石や流倒木からなる伏流水中に産卵する。卵の色は白緑で、その卵嚢は外皮に縦条をもつ。1腹卵数はおおそ50内外。幼生期間は水生の小型甲殻類などを食べて成長し、変態後は林床の倒木や転石の下などに隠遁し、ミミズ類などを食べる。幼生にはふ化当年の秋までに変態する個体と、越冬して変態する個体とがある。隠岐諸島の島後(島根県)に固有の種で、基準標本産地も同島。

県内での生息地域・生息環境

隠岐の島町に限られる。奥山および里地里山にあって、天然の広葉樹林や針広混交樹林、または下層植生をもつ人工針葉樹林に覆われた谷筋とその周辺。

参考文献

松井正文(2025) 日本産サンショウウオ図譜, 312pp. 技術評論社, 東京.
日本爬虫両棲類学会(編)(2016) 日本爬虫両棲類学会第54回大会記録 講演要旨, 爬虫両棲類学会報, 2016 (1) : 58-97
日本爬虫両棲類学会(編)(2021) 新 日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.
大氏正己(1978) オキサンショウウオに関する知見-分布と生態を中心にして-. 動物と自然, 8 (9) : 25-29.
佐藤井岐雄(1943) 日本産有尾類総説, 536pp. 日本出版社, 大阪.

谷筋には年間を通じて清冽な流水がなければならぬ。

存続を脅かす原因

生息地域では、かつて植栽されたスギやヒノキを伐採するための林内路網(林道・林業専用道・森林作業道)整備が推進され、その結果として谷筋の分断にはじまり、降雨時における土砂や濁水の谷筋への流出が繁殖環境の悪化につながっている。また、林内路網が谷筋沿いに作設されたり伐採後の再造林がなされなければ、水質が悪化したり水源が枯渇したりするおそれがある。気候変動に伴う極端な高温や大雨の頻度と強度の増加もまた、溪床の干出や流出を招き、災害に係る復旧や対策のための土木工事で一変した水辺もある。さらに、生息地域の一部に侵入しているウシガエルによる捕食圧が懸念されるところである。

特記事項

本種は2010年に隠岐の島町の条例で天然記念物に指定されている。よって、その現状を変更し、またはその保存に影響をおよぼす行為をしようとするときは、同町教育委員会の許可を受けなければならない。ちなみに本種の幼生は島内で古くから「あしごず」「足のあるハゼ」の意と呼ばれてきた。

また、本種は2022年に種の保存法で特定第二種国内希少野生動物植物種に指定されている。

(執筆: 岩田 貴之)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

有尾目オオサンショウウオ科

オオサンショウウオ

Andrias japonicus (Temminck, 1836)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|-------------|-------------|-------------|
| 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



選定理由

大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあるため。

概要

全長は幼生期が3—20cm、変態後は最大150cmに達する。成体は扁平な頭部を中心に多数の疣状突起をもつ。体背の基色は褐色・黄色で黒斑がある。ただし、幼生初期の体色は黒色。後肢は5趾性。生活史は完全水生。また、夜行性が強い。おもに甲殻類や魚類を食べる。繁殖期は9月ごろで、成体は繁殖巣穴をめざして移動する。繁殖巣穴を占有するオスが群れ産卵を司り、かつ、卵塊および孵化幼生を保護する。冬眠をしない。卵囊の形状は数珠状で、1腹卵数はおおよそ500内外。孵化後、性成熟まで少なくとも十数年を要する。日本固有種で、本州中部の庄内川水系・木曾川水系、近畿・中国地方の淀川水系以西・錦川水系以東、四国の仁淀川水系および九州の駆館川水系に分布する。

県内での生息地域・生息環境

おもに中国山地の河川上流域。本種の繁殖巣穴は河岸水面下で川下に向けて狭く開口した奥行きある横穴で、その奥からは地下水が滲み出ている。その巣穴から離れた幼生の隠れ場所となる河床間隙を豊富に有し、かつ、幼体期の隠れ場所にもなる流域の小溪流との連続性が確保された山地河川。

参考文献

岩槻邦男・太田英利(編)(2022)環境省レッドリスト日本の絶滅危惧生物図鑑、350pp.丸善出版株式会社.東京.
公益財団法人広島市みどり生きもの協会(編)(2021)広島市安佐動物公園50周年記念 オオサンショウウオを知る 守る そして共に.176pp.公益財団法人広島市みどり生きもの協会.広島.
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新 日本両生爬虫類図鑑、234pp.サンライズ出版.彦根.
日本オオサンショウウオの会(編)(2016)オオサンショウウオ個体登録マニュアル.12pp.日本オオサンショウウオの会.朝来.
日本オオサンショウウオの会(編)(2025)全国オオサンショウウオ選上調査報告書.154pp.日本オオサンショウウオの会.広島.

存続を脅かす原因

林内路網整備や道路改良に起因する谷筋や河川への土砂流出による河床間隙の埋没、土地改良や災害復旧のための河川改修に伴う自然河岸の喪失、河川横断構造物(堰・ダム)や落差工による繁殖期移動の阻害や繁殖個体群の削減。また、大陸原産種(チュウゴクオオサンショウウオ)やそれとの交雑個体の人為的移動に基づく競合または遺伝浸透が懸念される。

特記事項

本種は文化財保護法に基づく特別天然記念物。また、種の保存法に基づく国際希少野生動物種。県内における地方名は「はんざげ」である。
ところで、河川中下流域で保護される個体について、その場所が干出のおそれがあるなどやむを得ない理由で移動させる必要がある場合、移転放流先を安易に河川上流域と定めず、最寄りの安定水域とすること。公共工事に伴う事前の取上げ個体も同じ。理由は、その個体が本種に酷似するチュウゴクオオサンショウウオや交雑個体だった場合、取り返しのつかない事態となるため。たとえ、その個体が在来種であっても、河川中下流域で定着した個体の体サイズは、たいてい上流域の個体群のそれより大きく、上流域における環境資源量にそぐわないばかりか、同種間における不要な競合を生じさせるおそれがある。
(執筆: 岩田 貴之)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

カメ目ウミガメ科

アカウミガメ

Caretta caretta (Linnaeus, 1758)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|-------------|
| — | — | 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) |

撮影者(提供者): (公財)しまね海洋館

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



選定理由

大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつあるため。

概要

成体は甲長70—100cmに達する。甲はハート型で、ほかのウミガメに比べて相対的に首が太く頭が大きい。肋甲板は通常5対で、2対の前額板の中央に小さな小鱗板がある。甲の背面は褐色、腹面は淡黄色で、甲の背面には付着生物が多い。繁殖期は5月—8月ごろ。産卵は2週間ほどの間隔で数回行われ、その間、メスは沖合の岩礁で休息する。メスは原則的に、夜になるのを待って砂浜に上陸し、産卵場所は植物帯の際より少し海側が選ばれる。1回に100—120個が、後肢で掘った深さ50cmぐらいの産卵巣に産み落とされる。卵は50—70日で孵化し、黒褐色の幼体は数日かけて砂表まで登ると、夜間に脱出して海に向かう。脱出からおおよそ1日の間「フレンジー」とよばれる興奮期を経て、流れ藻や浮遊物に依存する生活に入る。暖流を利用して外洋に泳ぎ出た後、遠くはアメリカ大陸の沿岸まで移動する。成長し、中央あるいは東部太平洋の生息海域を旅立った幼体は出生地である日本近海へと再加入する。回遊中はクラゲ類など浮遊性動物を、回遊後はヤドカリ類など海底性動物も捕食している。日本近海で繁殖活動する北太平洋個体群の産卵は、国外では韓国の済州島から数例の報告があるが、ほぼすべてが国内で行われるといえ、南西諸島から九州、

参考文献

岩槻邦男・太田英利(編)(2022)環境省レッドリスト日本の絶滅危惧生物図鑑、350pp.丸善出版株式会社.東京.
亀崎直樹(2012)ウミガメの自然誌-産卵と回遊の生物学、320pp.東京大学出版会.東京.
松井孝隆(1985)日本の両生類・爬虫類、160pp.小学館.東京.
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新 日本両生爬虫類図鑑、234pp.サンライズ出版.彦根.
上野真太郎・岡本慶・石原孝・亀崎直樹(2025)日本におけるウミガメ類の分布.爬虫両棲学会報、2025(2):127-144.

四国、茨城県以南の本州の太平洋岸に恒常的な産卵場が分布する。

県内での生息地域・生息環境

夜間に人工の明かりが届かない海岸で、奥行きある砂浜と、その沖合に岩礁があることが条件。しまね海洋館の調べ(未発表データ)によると、過去10年間における産卵の記録は、わずか2例に過ぎない(2015年に益田市で、2017年には出雲市で、それぞれ産卵巣が確認されている)。かつて、産卵や孵化幼体の脱出が確認された江津市の海岸では、風力発電事業などによって環境が悪化したのか、産卵情報が途絶えて久しい。また、上陸したメスが産卵に至らなかった事例も大田市などの海岸で確認されている。

存続を脅かす原因

海岸浸食に伴う砂浜の消失、漂着ごみの集積・浜辺からの騒音や光による上陸忌避、漁網に引っかかることによる溺死、異常気象で強度を増した台風に伴う波浪による卵塊の滅失。

特記事項

本種は、国際自然保護連合(IUCN)のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類(VU)とされている。
(執筆: 岩田 貴之・伏見 純)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

イズモサンショウウオ

Hynobius kunibiki Sugawara, Iwata, Yamashita et Nagano, 2021

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)



両生類・爬虫類

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種は2021年に、それまで混同されてきたヒバサンショウウオおよびサンインサンショウウオ（ともに2019年に記載された種で、それまではカスミサンショウウオと混同された。）の分類学的再検討を経て新種として記載された。基準標本産地は松江市上大野町にあって、種小名は島根半島の形成史に係る神話「国引き」に由来する。成体の全長は10cmほど。体色は背面が黒褐色ないし黄褐色で、尾の上下縁に明瞭な黄色の条をもつ。後肢は原則として5趾性。繁殖期は12-3月で、卵嚢の形は螺旋状。幼生は小型甲殻類などを、変態後はミミズ類などを食べる。島根県に固有の種で、出雲地方に分布する。

参考文献

岩田貴之 (2024) 「イズモサンショウウオ」人と科学の未来館サイビア (編)「全国山椒魚見聞録」 p.15. 人と科学の未来館サイビア。
松井正文 (2025) 日本産サンショウウオ図譜。312pp. 技術評論社。東京。
尾原和夫・大社高等学校 生物部 (1989) 日御碕のカスミサンショウウオ (予報) - 生活史と生態。島根県立大社高等学校 研究紀要, (8) :14-19。
大川博志・奥野隆史・宇都宮妙子 (2019) 西日本のカスミサンショウウオの3つの大きなグループ。爬虫両棲類学会報, 2019 (1) :9-21。
Sugawara, H., Iwata, T., Yamashita, H., & Nagano, M. (2021). Taxonomic reassessment of the Izumo Lineage of *Hynobius utsunomiyaorum*: Description of a new species from Chugoku, Japan. *Animals*, 11(8), 2187.

県内での生息地域・生息環境

松江市、出雲市、安来市および雲南市。大田市のごく一部にも分布する。奥山、里地里山および沿岸の林縁にあって、地下水が滲み出ている止水・静水域（ため池や側溝の場合もある。）および付近の林床に生息する。

存続を脅かす原因

宅地・山林開発または道路建設に伴う湿地の消失や交通事故、山林皆伐に伴う湿地環境の悪化、および捕食性外来種（アメリカザリガニ、ウシガエル、アライグマ）の分布拡大。

(執筆: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

イワミサンショウウオ

Hynobius iwami Matsui, Okawa, Nishikawa et Tominaga, 2019

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種、分布限界種(北限)、基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧 I 類

絶滅危惧 II 類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種は2019年に、それまで混同されてきたカスミサンショウウオの分類学的再検討を経て新種として記載された。基準標本産地は益田市遠田町にあって、種小名は県西部の旧国名「石見」に由来する。成体の全長は10cmほど。体色は背面が淡褐色で、尾の上下縁に明瞭な黄色の条をもつ。後肢は4趾性。繁殖期は1-5月で、卵嚢の形は螺旋状。幼生は小型甲殻類などを、変態後はミミズ類などを食べる。中国地方に固有の種で、島根県および広島県に分布するとされるが、筆者らの調べ（未発表データ）で山口県のごく一部にも分布することが判っている。

参考文献

松井正文 (2025) 日本産サンショウウオ図譜。312pp. 技術評論社。東京。
Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., & Tominaga, A. (2019). Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current herpetology*, 38(1), 32-90。
吉川夏彦・富永篤 (2019) 2013年以降の日本産有尾両生類の分類について。爬虫両棲類学会報, 2019 (2) :177-194

県内での生息地域・生息環境

浜田市、益田市、大田市、江津市および美郷町に既知産地があるが、筆者らの調べ（未発表データ）で川本町にも分布することが判っている。里地里山の林縁にあって、地下水が滲み出ている止水・静水域（ため池や側溝の場合もある。）および付近の林床に生息する。

存続を脅かす原因

宅地・山林開発や道路建設に伴う湿地の消失や交通事故、山林皆伐に伴う湿地環境の悪化、および捕食性外来種（アメリカザリガニ、ウシガエル、アライグマ）の分布拡大。

(執筆: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

サンインサンショウウオ

Hynobius setoi Matsui, Tanabe et Misawa, 2019

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

分布域極限種、分布限界種(南限)

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)



選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種は2019年に、それまで混同されてきたカスミサンショウウオの分類学的再検討を経て新種として記載された。種小名は瀬戸武司博士(島根大学名誉教授)に献名されたもの。成体の全長は10cmほど。体色は背面が暗緑褐色で、尾の上下縁に明瞭な黄色の条をもつ。後肢は5趾性。繁殖期は12-3月で、卵嚢の形は螺旋状。幼生は小型甲殻類などを、変態後はミミズ類などを食べる。山陰地方に固有の種で、兵庫県、鳥取県および島根県に分布する。

参考文献

松井正文 (2025) 日本産サンショウウオ図譜, 312pp. 技術評論社, 東京.
Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., & Tominaga, A. (2019). Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current herpetology*, 38(1), 32-90.
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新日本両生爬虫類図鑑, 234pp.サンライズ出版,彦根.
吉川夏彦・富永篤(2019)2013年以降の日本産有尾両生類の分類について. 爬虫両棲類学会報, 2019 (2) :177-194.

県内での生息地域・生息環境

松江市(東出雲地方)および安来市。林縁にあって地下水が滲み出ている止水・静水域(側溝の場合もある。)および付近の林床に生息する。

存続を脅かす原因

宅地・山林開発や道路建設に伴う湿地の消失、山林皆伐に伴う湿地環境の悪化、および捕食性外来種(アメリカザリガニ、ウシガエル、アライグマ)の分布拡大。

(執筆:岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

チュウゴクブチサンショウウオ

Hynobius sematonotos Tominaga, Matsui et Nishikawa, 2019

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種、分布限界種(北限)、隔離分布種

環境省カテゴリー

絶滅危惧 II類(VU)



選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

成体は全長12cmほど。茄子紺の背側面に多数の銀色小型地衣状斑紋を有し、腹面におよぶ。尾は基部が円筒形で、次第に側扁する。後肢は5趾性。繁殖期は3-5月で、伏流水中に産卵する。卵嚢は外被が脆弱で釣針状によじれる。幼生は、背側部が小麦色で大小多数の黒色斑紋をもち、前後肢趾に黒爪が生じない。そして、小型甲殻類などを食べる。さらに、孵化した年内に変態するが、一部に越年変態する個体もみられる。変態後はミミズ類などを食べる。中国地方に固有の種で、全5県に分布する。

参考文献

岩田貴之・佐藤仁志(2019)「松江市の両生・は虫類」松江市史編集委員会(編)「松江市史 史料編1 自然環境」p.445-449. 松江市.
松井正文(2025)日本産サンショウウオ図譜, 312pp. 技術評論社, 東京.
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新日本両生爬虫類図鑑, 234pp.サンライズ出版,彦根.
尾原和夫(1986)益田のブチサンショウウオ-その生活史と生態-. 島根野生生物研究会会報, (4) :1-6
島根県小中学校理科教育研究会(編)(2024)令和版 島根の自然は生きている. 196pp. 山陰中央新報社, 松江.

県内での生息地域・生息環境

出雲市、浜田市、益田市、雲南市、奥出雲町、飯南町、邑南町、津和野町および吉賀町に既知産地があるが、筆者の調べ(未発表データ)で大田市、江津市、美郷町および川本町にも分布することが判っている。また、松江市および安来市にも分布している可能性がある。奥山および里地里山にあって、天然の広葉樹林や針広混交樹林、または下層植生をもつ人工針葉樹林に覆われた谷筋の、年間を通じて清冽な流水がある源流域に生息する。なお、出雲北山山地は分布の北限だが、分布域が隔離されている。

存続を脅かす原因

山林・ダム開発や道路建設(盛土による埋立て)に伴う谷筋の消失および分断、ならびに山林皆伐に伴う溪流環境の悪化。

(執筆:岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

ニセヒバサンショウウオ

Hynobius pseudotsunomiyaorum Sugawara, Iwata, Naito, Yamada, Onomura et Nagano, 2023

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

中国地方固有種・分布限界種(北限)

環境省カテゴリー

-



両生類・爬虫類

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種は2023年に、それまで混同されてきたヒバサンショウウオ(2019年に記載された種で、それまではカスミサンショウウオと混同された。)の分類学的再検討を経て新種として記載された。成体の全長は10cmほど。そして、体色に関しては、①背側部の基色が茶褐色、②尾の上縁にもつ黄茶色の条が明瞭、③尾の下縁には黄茶色の条をもたない、④背中線をもたない、といった傾向にある。さらに、前・後肢を体側に沿って後方・前方に折り返すと、両指趾が重なる傾向にある。後肢は4趾性。繁殖期は2-3月で、卵囊の形は螺旋状。幼生は小型甲殻類などを、変態後はミズミズ類などを食べる。中国地方に固有の種で、島根県および広島県の一部に分布する。

参考文献

Sugawara, H., Iwata, T., Naito, J., Yamada, M., Onomura K., & Nagano, M. (2023). Taxonomic validity of *Hynobius hidamontanus* (Caudata: Hynobiidae): descriptions of four new species from western Honshu, Japan. *American Journal of Zoological Research*, 8(1): 6-26.

内藤順一・菅原弘貴・岩田貴之・永野昌博(2026) 広島県の止水産卵性サンショウウオ。比和科学博物館研究報告, (67): 45-69.

県内での生息地域・生息環境

大田市、飯南町および美郷町。奥山および里地里山の谷筋にあって、地下水が滲み出ている止水域および静水域ならびに付近の林床に生息する。

存続を脅かす原因

山林開発や道路建設に伴う湿地の消失、および山林皆伐に伴う湿地環境の悪化。

(執筆者: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

ヒダサンショウウオ

Hynobius kimurae Dunn, 1923

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

分布限界種(西限)
隔離分布種

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧I類

絶滅危惧II類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

成体の全長は13cmほど。紫褐色の背側面に多数の黄金色小型雲状斑紋を有し、腹部におよぶことがある。尾は胴よりも長く太い円筒状で、ふつう後半部でも側扁せず、にびい末端に終わる。後肢は5趾性。繁殖期は2-4月で、渓流の岩石下に産卵する。卵囊は外被が強靱で牛角状に反る。幼生は、背側部が小麦色で大小多数の黒色斑紋をもち、前後肢趾に黒爪が生じる。そして、小型甲殻類などを食べる。また、孵化した年内に変態するが、越年変態する個体もみられる。変態後はミズミズ類などを食べる。本州に固有の種で、新潟県、長野県および愛知県以西に分布する。

参考文献

岩田貴之・西川完途・松井正文・吉川夏彦(2007) 島根半島のヒダサンショウウオについて。爬虫両棲類学会報, 2007(2): 129-132.

松井正文(2025) 日本産サンショウウオ図譜, 312pp. 技術評論社, 東京.

日本爬虫両棲類学会(編)(2021) 新日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.

大氏正己(1982) 「ヒダサンショウウオ」 島根県大百科事典編集委員会・山陰中央新報社開発局(編) 『島根県大百科事典 下巻』 p.385. 山陰中央新報社.

島根県小中学校理科教育研究会(編)(2024) 令和版 島根の自然は生きています, 196pp. 山陰中央新報社, 松江.

県内での生息地域・生息環境

松江市、安来市、雲南市、奥出雲町および飯南町に既知産地があるが、著者の調べ(未発表データ)で浜田市、益田市、美郷町、邑南町および吉賀町にも分布することが判っている。奥山および里地里山にあって、天然の広葉樹林や針広混交樹林、または下層植生をもつ人工針葉樹林に覆われた谷筋の、年間を通じて清冽な流水がある源流域に生息する。ただし、垂直分布で見ると、県東部における生息高度の低下が示唆され、安来市には標高が100m程度の繁殖地もある。なお、吉賀町は分布のほぼ西限にあたり、松江北山山地は分布域が隔離されている。

存続を脅かす原因

山林開発や道路建設(盛土による埋立て)に伴う谷筋の消失や分断、および山林皆伐に伴う渓流環境の悪化。

(執筆者: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

ヒバサンショウウオ

Hynobius utsunomiyaorum Matsui et Okawa, 2019

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

準特産種・分布限界種(北限)、
隔離分布種

環境省カテゴリー

絶滅危惧 I B類(EN)



■ 選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

■ 概要

本種は2019年に、それまで混同されてきたカスミサンショウウオの分類学的再検討を経て新種として記載され、2023年には再記載された。成体の全長は10cmほど。そして、体色に関しては、①背側部の基色は黒褐色、②尾の上縁にもつ黄茶色の条は明瞭、③尾の下縁には黄茶色の条をもたない、④背中線をもつ、といった傾向にある。後肢は原則として4趾性だが、例外として5趾性の集団もある。繁殖期は12-5月で、卵嚢の形は螺旋状。幼生は小型甲殻類などを、変態後はミミズ類などを食べる。中国地方に固有の種で、鳥取県、島根県、岡山県および広島県に分布する。

●参考文献

岩田貴之 (2010) 島根県安来市におけるカスミサンショウウオの初記録. 爬虫両棲類学会報, 2010 (1) :37-40.
Matsui, M., Okawa, H., Nishikawa, K., Aoki, G., Eto, K., Yoshikawa, N., Tanabe, S., Misawa, Y., & Tominaga, A. (2019). Systematics of the widely distributed Japanese clouded salamander, *Hynobius nebulosus* (Amphibia: Caudata: Hynobiidae), and its closest relatives. *Current herpetology*, 38(1), 32-90.
大川博志・岩田貴之 (2015) カスミサンショウウオ高地型の問題点. 九州両生爬虫類研究会誌, (6) :43-46.
島根県小中学校理科教育研究会 (編) (2024) 令和版 島根の自然は生きている. 196pp. 山陰中央新報社. 松江.
Sugawara, H., Iwata, T., Naito, J., Yamada, M., Onomura, K., & Nagano, M. (2023). Taxonomic validity of *Hynobius hidamontanus* (Caudata: Hynobiidae): descriptions of four new species from western Honshu, Japan. *American Journal of Zoological Research*, 8(1): 6-26.

■ 県内での生息地域・生息環境

松江市(美保関地方)、安来市、雲南市、奥出雲町および飯南町。奥山および里地里山の谷筋にあって、地下水が滲み出ている止水域および静水域ならびに付近の林床に生息する。生息地でもっとも低い場所は美保関地方にあって、その標高は5m。なお、美保関地方は分布の北限だが、分布域が隔離されている。

■ 存続を脅かす原因

山林開発や道路建設に伴う湿地の消失、および山林皆伐に伴う湿地環境の悪化。

(執筆: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

有尾目サンショウウオ科

ハコネサンショウウオ

Onychodactylus japonicus (Houttuyn, 1782)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

-



■ 選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

■ 概要

成体の全長は15cmほど。背面の基色は暗赤褐色か紫色を帯びた暗褐色で、中央部の全長にわたって不規則に波打った赤色や赤褐色の縦条をそなえる。腹面は暗褐色ないし灰色で、胸部には1対の暗色斑紋をもつのがふつう。眼は大きくて著しく突出する。尾は全長の1/2よりも長い。また、尾の先端部は、多少とも側扁していることが多い。後肢は5趾性。繁殖期は5-8月で、地下水中に産卵する。幼生は小型甲殻類などを食べ、数年かけて変態する。変態後はミミズ類などを食べる。本州に固有の種で、茨城県北西部以西および新潟県中北部以南に分布する。

●参考文献

松井正文 (2025) 日本産サンショウウオ図譜. 312pp. 技術評論社. 東京.
日本爬虫両棲類学会 (編) (2021) 新 日本両生爬虫類図鑑. 234pp. サンライズ出版. 彦根.
尾原和夫 (1983) 西中国山地のハコネサンショウウオ. 採集と飼育, 45 (12) :532-534.
島根県小中学校理科教育研究会 (編) (2024) 令和版 島根の自然は生きている. 196pp. 山陰中央新報社. 松江.

■ 県内での生息地域・生息環境

浜田市、益田市(匹見地方)、奥出雲町、飯南町および邑南町に分布する。奥山にあって、天然の広葉樹林や針広混交樹林、または下層植生をもつ人工針葉樹林に覆われた谷筋の、年間を通じて清冽な流水がある源流域に生息する。なお、匹見地方は分布のほぼ西限にあたる。

■ 存続を脅かす原因

山林開発や道路建設(盛土による埋立て)に伴う谷筋の消失および分断、ならびに山林皆伐に伴う溪流環境の悪化。

(執筆: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

無尾目ヒキガエル科

ニホンヒキガエル

Bufo japonicus Temminck et Schlegel, 1838

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



両生類・爬虫類

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種の頭胴長はオスで80-163mm、メスで84-176mm。背面が黄褐色、褐色または暗褐色で、腹面は淡黄色。鼓膜は円形または楕円形で、その直(長)径は眼と鼓膜との間隔にほぼ等しいのがふつう。繁殖期は3-4月。メスを待つオスは水辺を歩き回ったり、水に半身浸かったりしながら鳴いている。メスは、長さが10mにもおよぶひも状の卵塊を産む。卵塊は6,000-14,000個ぐらいの卵を含む。幼生は黒一色で斑紋をもたない。変態後は、主として陸上で生活し、繁殖期以外はあまり水に入らない。日本の固有種で、本州西南部、四国、九州、大隅諸島などに自然分布する。

参考文献

Chiba, H., Yasui, Y., Osumi, M., Oshima, N., Takahashi, M., Egawa, Y., Yamaguchi, T., Fujita, H., Numata, H., Asazuma, Y., & Kuriyama, T. (2025). Predation of the Jaocnese Common Toad *Bufo japonicus* by Invasive Raccoons. *Current herpetology*, 44(2), 177-188.
松井正文・前田憲男 (2018) 日本産カエル大鑑, 272pp. 文一総合出版, 東京.
日本爬虫両棲類学会編 (2021) 新 日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.

県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県域。産卵は池、側溝、溪流沿いの水たまりなどの止水域で行われる。卵塊は浅い水底に産み放されるか、水草などに巻きつけられて比較的水面に近いところにある。

存続を脅かす原因

道路建設、ため池の廃止、農地転用(太陽光発電設備の設置)、山林皆伐(森林作業道の開設を含む)、およびアライグマによる捕食圧。
(執筆者: 岩田 貴之・寺岡 誠二)

準絶滅危惧 (NT)

無尾目アカガエル科

トノサマガエル

Pelophylax nigromaculatus (Hallowell, 1861)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| - | - | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧I類

絶滅危惧II類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種の頭胴長はオスで38-81mm、メスで63-94mm。背面の基色は緑色、褐色、淡灰褐色または黄色みを帯びた白色。背中線上に吻端から総排出口に達する色の淡い縦条があり、背側線の隆条も同じ色を呈するので、全体としては3本の淡色縦条を形成している。繁殖期は4-5月。メスは、直径20cmにおよぶ卵塊を産む。国内では本州の大部分、四国、九州、種子島に自然分布する。

参考文献

藤田宏之・寺岡誠二 (2021) 両生類の繁殖利用を目的とした放棄水田ビオトープの状況とその管理. *農業および園芸*, 96 (11) : 978-985.
松井正文・前田憲男 (2018) 日本産カエル大鑑, 272pp. 文一総合出版, 東京.
日本爬虫両棲類学会編 (2021) 新 日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.

県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県域。生息場所は水田をはじめとする浅い止水域。繁殖場所は、田植えで水が張られたばかりの水田を主とし、加えて、幼生は水田が中干しされても一時的に待避できる水たまりや土水路がなければ生存できない。また、放棄水田をビオトープに活用した場所でも、初めの頃は産卵がみられるが、数年ごとに池干しなどの維持管理がなされなければ、繁殖がみられなくなる。

存続を脅かす原因

土地改良(乾田化)、中干しの強化、農地転用(太陽光発電設備の設置)およびため池の廃止。
(執筆者: 岩田 貴之・寺岡 誠二)

準絶滅危惧 (NT)

無尾目アカガエル科

オキタゴガエル

Rana okiensis Daito, 1969

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|-------------|------------|------------|
| 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



両生類・爬虫類

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種は2023年に、タゴガエル亜種ではなく独立種とされた。基準標本産地は島根県隠岐島後と推定される。本種の頭胴長はオスで38—43mm、メスで45—53mm。形態は基本的にタゴガエルに似ているが、体は比較的細く、頭も幅が長さと同大か、やや小さい。吻端はタゴガエルよりも円く終わっており、外鼻孔は吻端寄りに位置する。みずかきはタゴガエルよりもよく発達し、第4趾で第2関節ないし、第2関節と第3関節の間に達する。後肢もタゴガエルよりやや長く、脛跗関節は眼と外鼻孔の間ないし、吻端よりかなり前方に達する。繁殖期は2—3月。隠岐諸島に固有の種で、島後および西ノ島(島根県)に分布する。

参考文献

Eto, K., & Matsui, M. (2023). A New Brown Frog from the Goto Islands, Japan with Taxonomic Revision on the Subspecific Relationships of *Rana tagoi* (Amphibia: Anura: Ranidae). *Current Herpetology*, 42(2), 191-209.
 松井正文・前田憲男(2018) 日本産カエル大鑑, 272pp. 文一総合出版, 東京.
 日本爬虫両棲類学会編(2021) 新 日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.
 笹木快斗・山岸聖・高原輝彦(2022) 隠岐島前西ノ島美田ダム上流におけるオキタゴガエルの発見例, ホシザキグリーン財団研究報告, (25) :217-218.
 島田孝(2005) 隠岐島前の西ノ島からオキタゴガエルの初記録, ホシザキグリーン財団研究報告, (8) :218.

県内での生息地域・生息環境

隠岐の島町および西ノ島町の山地にすむ。産卵場所は溪流の岸などの、伏流水に洗われるような割れ目や穴の奥。

存続を脅かす原因

道路建設、ダム開発、砂防・治山施設、河川改修および山林皆伐。
(執筆者: 岩田 貴之)

準絶滅危惧 (NT)

無尾目アオガエル科

モリアオガエル

Zhangixalus arboreus (Okada et Kawano, 1924)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者): 寺岡誠二

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種の頭胴長はオスで42—60mm、メスで59—82mm。背面は緑色または暗緑色。大腿部後面の斑紋が比較的粗雑で多くは不規則につながる。また、背面に黄色い斑点の現れることがない。繁殖期は4—7月。卵塊は白い泡状でシュレーゲルアオガエルのもの(長径70—100mmぐらい)より大きい。卵は黄白色で直径2.6mmぐらい。1卵塊の中に300—800個ぐらい含まれている。孵化した幼生は、卵塊の中である程度発育した後、卵塊の下部から水中に落ちて、ほかのカエルの幼生と同じような生活を送る。日本の固有種で、本州に分布する。

参考文献

今井悟・安藤誠也(2025) 三瓶山姫逃池で確認されたモリアオガエルの特異な死骸集団, 島根県立三瓶自然館研究報告, (23) :29-35.
 桑原一司(編)(2000) のんびり瑞穂-瑞穂町自然観察ガイドブック-, 136pp. 瑞穂町教育委員会, 瑞穂.
 松井正文・前田憲男(2018) 日本産カエル大鑑, 272pp. 文一総合出版, 東京.
 日本爬虫両棲類学会編(2021) 新 日本両生爬虫類図鑑, 234pp. サンライズ出版, 彦根.

県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県域。産卵場所は、山地および里地の池や水たまりの、上の木の葉や小枝からぶら下げられるか、水辺の草の上や地上に産みつけられる。

存続を脅かす原因

ため池の廃止、道路建設、山林皆伐、不法投棄(水質悪化)および異常気象(繁殖期における少雨・渇水)。
(執筆者: 岩田 貴之・寺岡 誠二)

準絶滅危惧 (NT)

無尾目アオガエル科

カジカガエル

Buergeria buergeri (Temminck et Schlegel, 1838)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):岩田貴之

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



両生類・爬虫類

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種の頭胴長はオスで37-44mm、メスで49-69mm。背面は暗灰褐色で、個体によっては緑色がかっているものもある。頭部は比較的細くて扁平。眼鼻線は非常ににぶいが、頬部は明瞭に凹んでいる。鼓膜は周囲が白っぽい顆粒に囲まれている。繁殖期は4-8月。オスは水面から出た岩石の上に、なわばりをもって定着し、盛んに鳴いてメスを呼ぶ。産卵は水中の岩石の下でなされる。孵化した幼生は流水中で、水底の砂利や小石の間で生活し、石の表面に着生した藻類を削りとって食べる。変態期は6-9月。非繁殖期には樹上生活もし、メスや幼体ではそうした個体が少なくない。日本本土の固有種で、本州、四国および九州に分布する。

参考文献

松井正文・前田憲男(2018)日本産カエル大鑑。272pp。文一総合出版、東京。
日本爬虫両棲類学会編(2021)新日本両生爬虫類図鑑。234pp。サンライズ出版、彦根。
寺岡誠二(2013)出雲市で発見されたアルビノのカジカガエル幼生。ホシザキグリーン財団研究報告。(16):214。

県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県域。おもに里地里山の山地河川ならびに付近の森林にすんでいるが、その下流域にあたる平野の、早瀬を有する低地河川にもみられる。

存続を脅かす原因

河川工事による環境資源(本種の繁殖場所や成体の食べ物としての昆虫類)の減少。

(執筆:岩田 貴之・寺岡 誠二)

準絶滅危惧 (NT)

カメ目イシガメ科

ニホンイシガメ

Mauremys japonica (Temminck et Schlegel, 1838)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|------------|
| — | — | 準絶滅危惧 (NT) |

撮影者(提供者):寺岡誠二

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

概要

本種の背甲長はオスで130mm、メスで200mmぐらい。頭部背面の皮膚は全体に平滑。背甲の後縁は鋸歯状。腹甲は様に黒色。雑食性で、昆虫やミズミズのような動物質のほか、果実や草木の葉なども食べる。淡水性。メスは6-8月に川や池の岸近くに穴を掘り、5-12卵ほどを産む。冬季は、水中で越冬する。日本固有種で、本州、四国、九州および周辺島嶼に分布する。

参考文献

藤田宏之・寺岡誠二(2013)島根県におけるニホンイシガメの保全の必要性。ホシザキグリーン財団研究報告。16:309-313。
岩槻邦男・太田英利(編)(2022)環境省レッドリスト日本の絶滅危惧生物図鑑。350pp。丸善出版株式会社、東京。
小菅康弘(2005)日本産淡水性カメ類の現在と未来。ハ・ペト・ロジー(3):150-153。
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新日本両生爬虫類図鑑。234pp。サンライズ出版、彦根。
矢部隆(2003)「イシガメの1年」寺岡誠二・古林敏彦・淀江賢一郎(編)「宍道湖自然館第6回特別展「まみずのカメ」展示解説書 まみずのすむカメの現状と未来」p.32-37。島根県立宍道湖自然館ゴビウス・ホシザキグリーン財団。

県内での生息地域・生息環境

本土および隠岐。平地に比べて多くの個体がみられる山地および里地の場合、越冬場所でもある池や谷川のほか、春から夏にかけての灌漑節には水田の中でも活動している。つまり、池や谷川と水田との間を季節的に往来できる自然的な河岸・水際部が保存されている地域。平地においても、少数ではあるが水田や小河川で生息が確認されている。

存続を脅かす原因

生息環境の人為的改変(ため池の廃止や河川の垂直護岸など)、クサガメとの異種間交雑、ミシシippiaカミミガメとの競合による衰退、アライグマによる捕食圧および商用目的の乱獲。

(執筆:岩田 貴之・寺岡 誠二)

準絶滅危惧 (NT)

有鱗目ナミヘビ科

ヒバカリ

Hebius vibakari vibakari (Boie, 1826)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) |

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):寺岡誠二



■ 選定理由

分布域の一部において生息条件が悪化している傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるため。

■ 概要

本種の全長は40—58cm。頭胴部および尾部の背面は褐色または暗灰褐色で、頸部の背面には、最後の上唇板から斜め上後方に向かう、よく目立つ淡黄色の斑紋がある。腹板と尾下板の両側には、黒褐色の斑点が1つずつあり、体の全体に沿って破線のように並び、朝や夕方、日没後に活動することが多い。とくに水辺を好み、カエル類(幼生を含む)をはじめ、ミミズ類や魚類を食べる。日本固有種で、本州、四国、九州および周辺島嶼に分布する。

● 参考文献

福山伊吹・福山亮部・田原義太慶・堺淳(2025)日本のヘビ。256pp.誠文堂新光社,東京。
日本爬虫両棲類学会編(2021)新日本両生爬虫類図鑑。234pp.サンライズ出版,彦根。

■ 県内での生息地域・生息環境

本土および隠岐。平地から山地まで、カエル類をはじめ、ドジョウやミナメダカが生息する水田を中心にみられ、圃場整備された土地にはいない。また、放棄水田を利用したビオトープ(出雲市や雲南市)でもみることができる。

■ 存続を脅かす原因

土地の改変や農業の変容による環境資源(本種の生息場所や食べ物としての無尾目両生類)の減少。

(執筆:岩田 貴之・寺岡 誠二)

情報不足 (DD)

有尾目サンショウウオ科

シコクハコネサンショウウオ

Onychodactylus kinneburi Yoshikawa, Matsui, Tanabe et Okayama, 2013

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|-----------|
| — | — | 情報不足 (DD) |

島根県固有評価

分布域局限種

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):内藤順一



■ 選定理由

生息地が局限されているが、カテゴリーを判定するに足りる情報が得られていない種であるため。

■ 概要

成体の全長は14—16cm。背面の基色は薄茶色で、橙黄色から黄色の縦条をもち、基色との境界は明瞭だが、部分的に基色に溶け合う。腹面は白っぽくて、胸部に斑紋をもたないとされる。後肢は5趾性。繁殖期は5月で、伏流水中に産卵する。幼生は小型甲殻類などを食べ、数年かけて変態する。変態後はミミズ類などを食べる。日本固有種で、中国・四国地方に分布する。

● 参考文献

神林千晶(2023)ハコネサンショウウオたちの共存の秘密。京都爬虫両生類の会 けこけこ。5:30-32。
松井正文(2025)日本産サンショウウオ図譜。312pp.技術評論社,東京。
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新日本両生爬虫類図鑑。234pp.サンライズ出版,彦根。

■ 県内での生息地域・生息環境

筆者らの調べ(未発表データ)により、西中国山地に位置する複数の流域から本種の幼生が見いだされている。具体的には、天然の広葉樹林や針広混交樹林、または下層植生をもつ人工針葉樹林に覆われた谷筋の、年間を通じて清らかな流水がある源流域に、ハコネサンショウウオと同所的に生息している。

■ 存続を脅かす原因

山林開発や道路建設(盛土による埋立て)に伴う谷筋の消失や分断、および山林皆伐に伴う溪流環境の悪化。

(執筆:岩田 貴之・内藤 順一)

情報不足 (DD)

無尾目アカガエル科

ナガレタゴガエル

Rana sakuraii Matsui et Matsui, 1990

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|-----------|
| - | 情報不足 (DD) | 情報不足 (DD) |

撮影者(提供者): 岩田貴之

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

-



両生類・爬虫類

選定理由

どの生息地においても生息密度が低く希少であるが、カテゴリーを判定するに足りる情報が得られていない種であるため。

概要

本種の頭胴長はオスで38-56mm、メスで43-65mm。みずかきがよく発達し、オスではすべての趾で趾端の膨大部基部に達し、切れ込みはきわめて浅い。発達程度は産卵期(2-4月)にもっとも著しい。メスでは発達が悪いが、第4趾で第2関節に届く。産卵期のオスは、体側の皮膚が延びて大きく膜状に広がる。日本固有種で、本州の中西部に分布する。

参考文献

日本爬虫両棲類学会編(2021)新 日本両生爬虫類図鑑。234pp.サンライズ出版,彦根。
岡田純・田中浩・徳永浩之・岡田珠美(2009)中国地方西部からのナガレタゴガエルの初記録。爬虫両棲類学会報。2009(2):101-103。
徳永浩之(2017)島根県根祖川と寂地山周辺のナガレタゴガエルの分布に関する一考察。九州両生爬虫類研究会誌。(8):35-38。

県内での生息地域・生息環境

益田市および吉賀町の奥山にすむ。既知産地の標高は640m以上。そこは天然林および人工林から成る森林に覆われた河川。産卵場所は河谷が開けたところで流水中の岩石の下と思われるが、卵塊の発見には至っていない。なお、県内産地は分布のほぼ西限にあたる。

存続を脅かす原因

捕獲圧および山林皆伐。

(執筆: 岩田 貴之)

情報不足 (DD)

カメ目スッポン科

ニホンスッポン

Pelodiscus japonicus (Temminck et Schlegel, 1838)

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------|-----------|-----------|
| - | - | 情報不足 (DD) |

撮影者(提供者): 寺岡誠二

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

情報不足(DD)



絶滅野生絶滅

絶滅危惧I類

絶滅危惧II類

準絶滅危惧

情報不足

選定理由

どの生息地においても生息密度が低く希少であるが、カテゴリーを判定するに足りる情報が得られていない種であるため。

概要

日本在来とみられる本種だが、外来起源のチュウゴクスッポンとは外部形態での種や雑種の同定が困難であるため、国産のスッポン科の特徴として記すと次のとおりである。背甲長は最大で393mm。背甲および腹甲は柔らかい皮革状の皮膚でおおわれている。四肢には水かきが発達し、3本の爪を有する。水生傾向が強く、メスの産卵時を除き、陸上を歩行することは少ない。肉食傾向が強いが、しばしば植物質も食べる。産卵期は5-7月ごろであり、卵は球状で直径20mmぐらい。本州以南に分布する。

参考文献

日本爬虫両棲類学会編(2021)新 日本両生爬虫類図鑑。234pp.サンライズ出版,彦根。

県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県域。河川、ため池、湖沼および用排水路にすむ。とくに、河床が砂地の清流で、水域と陸域との連続性が確保された場所にみられる。ただし、在来集団と外来集団が混在している可能性が高い。

存続を脅かす原因

水辺環境の改変(垂直護岸やため池の廃止)、農薬や化学肥料を含む農業排水による水質悪化や河床の泥質化。また、チュウゴクスッポンとの異種間交雑が懸念される。

(執筆: 岩田 貴之・寺岡 誠二)

情報不足 (DD)

有鱗目タカチホヘビ科

タカチホヘビ

Achalinus spinalis Peters, 1869

カテゴリー区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|------------|------------|-----------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 情報不足 (DD) |

撮影者(提供者): 皆木宏明

島根県固有評価

-

環境省カテゴリー

-



選定理由

どの生息地においても生息密度が低く希少であるが、カテゴリーを判定するに足りる情報が得られていない種であるため。

概要

本種の全長は30-60cm。頭胴部および尾部の背面は褐色または暗黄褐色。通常、大型の個体ほど色彩は明るく、幼体では暗い。正中線上の1鱗列は黒い。幼体の色彩は全体が暗いため、この黒線が目立たないことも多い。体全体に構造色の光沢があり、とくに腹面の光沢は強い。夜行性で、日中は倒木や石、落ち葉の下などに隠れており、人目に触れる

参考文献

福山伊吹・福山亮部・田原義太・堺淳(2025)日本のヘビ。256pp.誠文堂新光社,東京。
皆木宏明(2008)島根県でのタカチホヘビ確認2例(ナミヘビ科)。島根県立三瓶自然館研究報告(6):35-36
日本爬虫両棲類学会(編)(2021)新 日本両生爬虫類図鑑。234pp.サンライズ出版,彦根。
尾原和夫(2007)タカチホヘビを松江市枕木山で採集。山陰自然史研究(3):22。
邑南町教育委員会 学びのまち推進課(編)(2024)史跡久喜銀山遺跡保存活用計画。125pp.邑南町教育委員会,邑南。

る機会は比較的少ない。おもにミミズ類を食べる。国内では本州、四国、九州および周辺島嶼に分布する。国外では、中国南東部にも分布するとされる。

県内での生息地域・生息環境

隠岐を除く県域。これまでに、松江市、大田市、雲南市および邑南町から記録がある。山地森林の谷筋沿いの林床にすむ。

存続を脅かす原因

林地開発(風力発電事業を含む。)、山林皆伐および道路建設。

(執筆: 岩田 貴之・寺岡 誠二)

情報不足 (DD)

有鱗目ナミヘビ科

シロマダラ

Lycodon orientalis (Hilgendorf, 1880)

カテゴリ区分

| 2004 | 2013/2014 | 2026 |
|---------------|---------------|--------------|
| 準絶滅危惧 (NT) | 準絶滅危惧 (NT) | 情報不足 (DD) |

撮影者(提供者): 秋吉英雄

島根県固有評価

—

環境省カテゴリ

—



選定理由

どの生息地においても生息密度が低く希少であるが、カテゴリを判定するに足りる情報が得られていない種であるため。

概要

本種の全長は35—70cm。背面は淡灰褐色または灰褐色、胴にはおよそ40個、尾に15—20個ぐらいの明瞭な黒褐色の横帯がある。頭部は黒褐色で、側頭部の広報から後頭部にかけて白っぽい斑紋がある。夜行性で、日中は倒木や石の下、石垣の中などに隠れており、人目に触れる機会は比較的少ない。おもにトカゲや小さなヘビを食べる。日本固有種で、北海道、本州、四国、九州および周辺島嶼に分布する。

参考文献

福山伊吹・福山亮部・田原義太慶・堺淳 (2025) 日本のヘビ。256pp.誠文堂新光社,東京。
日本爬虫両棲類学会編 (2021) 新 日本両生爬虫類図鑑。234pp.サンライズ出版,彦根。
林成多 (2005) 島根県におけるシロマダラの採集例。ホシザキグリーン財団研究報告。(8) :184。

県内での生息地域・生息環境

本土および隠岐 (島後・西ノ島)。山地や里地の、住宅地の石垣の周辺などで、偶発的に目撃されている。少なくともトカゲ類の生息に適した環境にあって、昼間における隠れ場所があることが条件と思われる。

存続を脅かす原因

土地の改変による環境資源 (本種の隠れ場所や食べ物としての小型有隣目爬虫類) の減少および交通事故、ならびにイエネコを含む捕食性外来種による捕殺。

(執筆者: 岩田 貴之・寺岡 誠二)